

純潔と寛容(六)

本多弘之

bonda hiroyuki

利他

純潔であることと、寛容であろうとすることは、矛盾する。それは菩薩道の理念である。自利（自らが寛りを開く）と利他（苦悩の衆生をすくい上げる）とは、同時に成就することが困難であるのと、同型の問題であろう。

「自利利他」ということが、大乘（大きな乗り物）として仏陀の衆生救済の課題を受け継ごうとする求道者の共通の問題とされた。

自利とは、この世のいわゆる自己拡大のことではない。自分が利益を得るといふ言葉ではあるが、仏道の利益とは「無我」の真理を体得することである。そのことを求めながら、それを妨げてくるものが、自分のなかから起こってくる、自己主張への根の深い要求である。それを勝他という。他に勝ちたいという要求である。

一般的に言うなら、生命体が自己を存続するために、生命の根底にこういふ要求を植え付けられて生まれてきているのかもしれない。自己、さらには自己の種族の存続への本能的な要求が、生命の営みの当然のごときあり方である。あるいは、遺伝子というものに、そういう強い自己存続の意志とでもいうものが、無始以来、組み込まれているのかも知れない。

自然界では、当たり前のように「弱肉強食」の繰り返しが行われ、適者存続の、厳粛で冷厳な事実があるのである。

ところが、これに対して、仏陀は真つ向から反対のような課題を出された。当然のように、自我の張り合いや勝他の競技など、悲喜の宴を生きていることに、深い疑問を抱かれたからである。我を張って生きていくことの根に、いつでも「老・病・死」ということが巣くっていることに気づかれたからである。

そして、我を前提に、自分の領域を張り広げ、飽くことなく欲望を延長することに関わって、私の欲望を自己そのもの思っているのが、この世の一般の常識である。しかし、自我そのものの存在の根に、滅びが張り付いていることに気づいてしまったのである。

この世の大前提が、滅びを孕むことを、私たちの自我意識は承認することができない。永久に自我拡大を果たしていきたい。けれども、本来、私たちは有限の命なのである。有限であって、変わることなく存続するような「我」はないのである。このことを生存の真理として受け止め、その真理を生きることに限らない喜びを見いだしたのが仏陀なのである。そしてそのことを、世の人々にも自覚してもらいたいという願いに立ち上がったことから、仏法として伝えられる言葉を生み出していくことになったのである。

その願いの対象となったこの世の人々を、「衆生」とか「有情」というが、その人々の普通の意識状態を「凡夫」という。この凡夫の意識を動かすものを「煩惱」というのである。つまり私たちは、煩惱に動かされることを、自分自身だと錯覚して、この世の欲望の営みに限りなく引き込まれているのである。だから、仏法にとつては、この煩惱がらみの生存から、自己自身をいかにして取り戻すことができるのか、ということが「自利」の方向となるであろう。

そしてそのことを、人間の共通の方向にしていきたいということが、「利他」という言葉の示す方向となる。「他」とは、さきほどの「衆生」のことである。この世のことにとどまりと沈没して、自我を取り巻く状況に苦難を感じてはいても、自己そのものを吟味することができずにいる「煩惱具足」の凡夫である。そういうあり方を、「苦悩の衆生よ」と哀愍して、「存在の真理に目覚めよ」と呼びかける方向が「利他」である。

自らが「無我」の真理を体得することとしての「自利」と、そのことを苦悩の衆生に自覚させようとする「利他」とを満足することが、仏陀という存在だとされるのである。このことを自己の生存の根本動機として生きているということは、私たちにとつて、一応「そうだ」と思っても、この世のなかでそれを持続

することは、ほとんど不可能に近い。有限の存在であるにもかかわらず、われらの自我拡大への野望は、遺伝子に張り付いたような深みにまで浸透していて、「自利」の達成が成り立ちがたいのである。自分に成り立たないことを、衆生に説得できるはずがない。

けれども、衆生のさらなる深みには、「濁世の有情よ」と呼びかけ続けて、「自己を取り戻せ」とささやく、「如来の勅命」がある。すなわち、本願として教えられる如来の願いが、凡夫のいのちの根源にはたらいているのである。否、そういうことを感じて教えてくださる伝承があるのである。

その眼からは、利他とは、この一切の衆生を真理のいのちに呼び戻さなければ止むことができないという「大悲の願心」の、有情に対するはたらきかけの謂である。私たち凡夫からの言葉ではなく、一切の人類の根源にはたらき続ける、真理そのものの方向を教える言葉である。この大悲には、欲望や煩惱で苦しむ衆生を排除するのではなく、その苦悩の根を抜くことを、真理そのものの永遠の課題とするような「志願無倦」の営みがある。それを見いだしていくことが、私たちが自己を取り戻すための、新たな方法となるのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)